

Soewojo Wojowasito dan Soewito Santoso. *Kamus Kawi(Djawa Kuno)* —Indonesia. Malang : Lembaga Penerbitan I. K. I. P., 1969. 327pp.
[mimeographed]

カウイ語（古代ジャワ語）は、インドネシアで高等学校の文化コースにおいても必須科目として教えられているにもかかわらず、その辞書については、今までのところ優れたものとしては、Winter, C. F. のカウイー・ジャワ語(1880), Tuuk, H. N. のカウイー・バリー・オランダ語 (1897~1912), Juynboll, H. H. の古代ジャワ・オランダ語 (1923) があるくらいであり、また、いずれも稀覯書となって一般的というわけにはゆかない。一方、小さなカウイー・ジャワ語、カウイー・インドネシア語（例えば、Wirjosuparto, R. M. S. のもの、1952.）辞書は若干あるが、これは簡単に過ぎて十分な使用にとっても堪えることができなかった。

ここに紹介する辞書の序言にもある通り、カウイー・インドネシア語辞書の必要性は強く望まれ、感じられていたのである。Wojowasito は中部ジャワ Malang の国立 Brawidjaja 大学の教授、インドネシアでは唯一の言語学史 (*Linguistik-Sedjarah Ilmu Perbandingan Bahasa*-, 1959) を書いているほか、カウイ語文法・読本 (*Kawicastra*, 1956.) のような著作もある。ただし、この辞書の原稿は、Adiparwa, Rāmāyana, Bhāratayuddha, Sutasoma を出典として Santoso が作成したのであり、Wojowasito はその原稿の校閲者である。この辞書は、Juynboll のものよりはるかに語彙数も増え、多種類の作品・文献を読むのにたいそう便利となった。しかし、Juynboll に見られた各語例に対する出典をすべて省いてしまったことのほか、各語彙における接辞の使用例を大幅に縮小したために、詳しい接辞法をこの辞書によって知ることはできなくなった。例えば、tinggal の項では、atinggal “残す” 一語のみを掲げてあるが、Juynboll には、matinggal “留まる” から始まって13例が出ている。また、マライ・ポリネシア諸言語に一般的な前鼻音化現象（接頭辞と語根との間に、語根の語頭音と同器官的な鼻音

を発生させる現象）はカウイ語において、特に重要な意味を持ち、その現象を起こす・起こさないが意味的弁別をになう場合がある。bañcana の項では、それがサンスクリット wañcana の借用語であることを示すと同時に、“災難、奸計、失望”の意味を記すのみであるが、実は、mabañcana “唆かす”，mamañcana “欺く” のように 意味的相違が接辞法によって生ずることをこの辞書は何も教えてくれないのである。

このような不満の点があるとはいえ、また、タイプ印刷のため不鮮明な箇所も多少あるにもかかわらず、その収録された語彙数において、この辞書はカウイ語学に対する一つの大きな貢献となるものである。また、特に地方の出版事情の困難な中において Malang の高等教育大学 (I. K. I. P.) 出版の払われた努力を認めるにやぶさかではない。

(崎山理・大阪外大)

ECAFE. *Water Legislation in Asia and the Far East*. Water Resources Series No. 31. New York : ECAFE/UN, 1967. xii + 183 pp.

ECAFE から出されている Water Resources Series(第22号までは旧名の Flood Control Series) は従来よりこの地域の水問題に関するまとまった情報をわれわれに提供してきてくれた。このシリーズは通常、水文学的あるいは技術的な側面をとり扱うことが多かったが、この第31号は事務局による域内各国の「水関係法」の概説的研究成果を特集したものである。

ECAFE 事務局は1962年の第19回総会を契機として域内各国の水関係法典の収集、英訳、比較検討というかなり困難な事業に着手し、Dante A. Caponera (アフガニスタン、ブルネイ、ビルマ、中華民国、香港、イラン、ニュージーランド、シンガポール、タイおよび西サモワ諸島を担当)、Lydia L. Vendiola (フィリピンを担当)、金沢良雄 (日本を担当) を中心メンバーとし、事務局から各国政府への質問書に対する詳細な回答をもとに、1967年いちおうの集大成を終えた。このうち本書がカバーして